HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ヤヒヤ・ケマルの「イスタンブル論」について
Author(s)	小山, 皓一郎
Citation	北海道大學文學部紀要, 42(4), 65-112
Issue Date	1994-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33632
Type	bulletin (article)
File Information	42(4)_PL65-112.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学部紀要 42-4 (1994)

ヤヒヤ・ケマルの「イスタンブル論」について

Yahya Kemal's essays on Istanbul

小 山 皓一郎

Koyama Kôichirô

はじめに
1．スコピエ・パリ・イスタンブル
2．郷土イスタンブル
3．イスタンブルの景観
4．イスタンブルの「風景」
5．イスタンブルの変容
おわりに

は じ め に

ヤヒヤ・ケマル・ベヤトル[1] (Yahya Kemal Beyatlı, 1884－1958) は，オスマン帝国からトルコ共和国へ，一代に二世を生きたトルコ詩人で，その作品は現代のトルコ人にとってすでに古典の列に入っている。その 74 年の生涯を簡単に紹介すれば，1884 年，当時まだオスマン領だったマケドニアの州都スコピエ（トルコ語名はユスキュプ）で生まれた。両親ともにオスマン朝初期のバルカン征服戦士の子孫で，共通の父祖としてスルタン・ムスタファ 3 世 (1757－1774) のときに軍管区司令官 (Sancak beyi) であったシェフス

ヴァル・パシャがいる。また母方の伯父は，詩人として名高いレスコフチャル・ガリプである。

父はオスマン帝国の地方官として，スコピエ市長もつとめた人物で，ニシュリ・イブラヒム・ナジという名が示すように，セルビアのニシュ地方の出身であった。バルカンのトルコ支配階層の血を引くヤヒヤ・ケマルは，後年自ら「ルメリアっ子」(Rumeli Çocuğu) と称している[2]。

幼少期をスコピエで過したヤヒヤ・ケマルは，13歳のとき (1897) 家族とともに港町サロニカに移転したが，同じ年に母ナキエ・ハヌムと死別する。1902年，勉学のため独りイスタンブルに到着した後，おそらく「青年トルコ人」組織のルートに乗って，1903年，海路フランスへ出発し，パリ到着から1912年まで留学生活を続ける。かれのパリ生活については多くの興味深い問題があるが，ここでは触れる余裕がない。

帰国後のヤヒヤ・ケマルは，「青年トルコ人」(正確に言えば「統一と進歩委員会」) 政権下の諸学校で教鞭をとり，とくにイスタンブル大学 (当時の名称は「諸学の家」Darül-fünun) で，文学・歴史学の教授をつとめた (1916－19)。第1次世界大戦後の混乱期にもイスタンブルにとどまったが，ムスタファ・ケマル (アタテュルク) の樹立したアンカラ政権 (「トルコ大国民会議」) に参加してローザンヌ講和会議に派遣され，大国民会議の議員に選出されて政界生活を開始した。

その間外交官としてポーランド (1923)，スペイン (1929)，ポルトガル (1931) の公使，パキスタン大使 (1947) を歴任した。1949年に退官，その後は文筆活動に専念したが，1958年イスタンブルで死去した。

以上がヤヒヤ・ケマルの公的な略歴であるが，かれは生涯を通じて詩と評論の執筆を続け，それらの大部分はトルコ国内の新聞・雑誌などに発表されている。トルコを代表する文人として尊敬を集め，その人柄を物語る多くの逸話や回想が出版されている。しかし，かれの作品は存命中にまとめられることはほとんどなく，死後に全集の形で集成されている。本稿で私が採り上げるのは，詩とならんでかれの声価を高めている評論のジャンルの諸作品である。もっとも作品と呼べるほど完成したものではなく，新聞・雑誌のコラ

ム，講演の筆記，書簡などから成る雑然とした文章の堆積であるが，だからこそこの中から，現代のトルコにはまれな文明批評家，ヤヒヤ・ケマルの思想を，多少とも体系づけてみたいというのが本稿の動機である。テーマとしては，かれが生涯を通じて最も愛着した都市イスタンブルをとりあげたい。「イスタンブル論」と題する著書は存在しないが，かれのこの都市に関する多くの論説は「ヤヒヤ・ケマル研究所」（Yahya Kemal Enstitüsü）編纂の全集第5巻「親愛なるイスタンブル」（Aziz İstanbul）にほとんど収録されている[3]。しかし，かれの自叙伝，随筆・書簡集，文学論集の中にも，イスタンブルに関する論及がしばしば現われているので，本稿はこれらを含めて，ヤヒヤ・ケマルの論じたイスタンブルの全体像を把握するように努めたい。

1．スコピエ・パリ・イスタンブル

ヤヒヤ・ケマルは後年トルコの文壇で「イスタンブル詩人」（İstanbul Şairi）という桂冠を捧げられるほど，この都市と密着した詩人であったが，その出身はイスタンブルから遠いバルカンの一隅であった。かれの未完の自叙伝は，次のように語りおこしている。

> 私は1884年の12月2日，スコピエ（ユスキユプ）のイスハーキエ街区にあった祖母アーディレ・ハヌムの邸で，この家の正面に向かって右側の裏部屋で夜明け近くに生まれたらしい。火曜日であった。この日スコピエでは珍しく雪が降った[4]。

ヤヒヤ・ケマルは，幼少期のすべてをマケドニアの都市スコピエですごした。この都市に対するかれの愛着は，ここがセルビア領土として奪われた(1912)ことで，かえって強い郷愁となっていく。またスコピエは，亡き母の追憶とも分ちがたく結びついている。もともとニシュの出身である父親にひきかえ，母とその一族はスコピエ土着の人々であった。上記のアーディレ・ハヌムは母方の祖母である。母の死をめぐって，かれはこう回想している。

> 私の周囲は来世的な雰囲気で満ちていたが，父に連れられて行った祭日礼拝のほかはお勤めをしらなかった。（中略）

私が信仰の義務を果たすようになったのは，13歳の時に母が死んでからである。母の魂のため毎夕のように，イサ・ベイ・モスクでコーラン36章（yasîn）の読誦をはじめた。私はこの門からイスラームの世界に入ったと言えよう[5]。

イスラームと母との結びつきは，実はこれだけにとどまらない。母性的なイスラームという本来あり得ないイメージが，ヤヒヤ・ケマルにあっては自然なものであったらしい。

1912年以降，帰らざる故郷となったスコピエは，追憶の中でいっそう美化され，聖別されていく。

スコピエは近年にいたるまで，初めの諸世紀の香気を完全に保存した一トルコ都市であった。ムラート2世時代の生き生きとした写し絵のようであった。住民はいまだにその方言で話し，固有の衣服を身に着け，往時そのままに暮らしていた。（中略）

この都市は征服王（ファーティヒ）時代の精神的な墓所であった。あらゆる片隅に聖者たちが横たわっていた。人々はバグダードとスコピエのどちらが多くの聖者をもつかと議論し，ウレマーたちもこの問題を解けなかった[6]。

失われた過去に対するノスタルジアは，ヤヒヤ・ケマル終生の主旋律として聞えてくるのだが，その崩芽は13歳にして初めて故郷の家を離れたときに，早くも認められるように思われる。

1898年，カルシュヤカ地区の貸家に引越したとき，スコピエへの愛着をいっそう感じた。2キロも離れていないのに，スコピエに対する郷愁（hasret）が私の心を焼いた[7]。

故郷スコピエからの出発は，実際にはトルコ・ギリシア戦争（1897）の勃発という政治情勢と，母とは対照的に開明的で，マケドニアの港市サロニカへの移住を希望する父の意志によるものだった。

1897年，ギリシアに対する宣戦布告のすぐ後に，一家をあげてスコピエからサロニカに移転した。父の強要によるこの移転は，母の結核を悪化させ，間もなく母は病床に臥した[8]。

ここでは父が敵役にされているが，先走りして言えば，この父親は息子の

良き理解者として，成人後も協力と金銭的援助を措しまなかった。開明的な父親とその息子に対する，保守的な母とその一族という対立の図式も，また顕著なのである。しかし，後年パリから帰国し，かれの言う「トルコ人らしさ」(Türklük)[9] を追求しはじめた頃のヤヒヤ・ケマルにとって，失われた故郷スコピエはトルコ都市の原景として，繰返し追憶されることになる。

スコピエはあまりに古く，あまりにトルコ的であったので，イスタンブルやサロニカから来る新しい単語や商品や歌謡などは，西洋かぶれ(alafranga)とみなされた。魚が水を感じないように，スコピエはトルコを感じず，トルコのすべての都市と同じく自らを単にイスラーム教徒として意識していた[10]。

ヤヒヤ・ケマルは，共和国政府の高官として後半生を過したが，文筆を通じて政治的立場を標榜することは自らに戒めていた。したがってスコピエの運命に対する次のような発言は，この詩人としては例外的なことに属する。

スラヴ人やヨーロッパ人は，我々がバルカンに5百年間も定住したことを，これで十分であるかのように宣伝し，この宣伝を我々の心にまで吹きこんだために，我々もこの宣伝を拒否できなくなっている。ああ，何という悲劇的な成行きであろうか[11]。

ところで彼にとっての第二の故郷，墳墓の地となったイスタンブルは，第一の故郷スコピエとどのような関係に置かれるのか。イスタンブルは，いつかれの地平に現れたのか。

私は十歳のルメリアっ子（Rumeli Çocuğu）であった。イスタンブルのことは何も知らなかった[12]。

イスタンブルへの最初の出発も彼自身の意思によるものではなく，後妻を迎えていた父親の世俗的な配慮の結果であった。

1902年の4月，私の生活を整え学問に専念させるため，私をイスタンブルに送ることがきめられた。この決定は余儀ない事情を伴っていた。当時の私は父や継母と合わず，親戚のフンバラジザーデ・ヤシャル・ベイの邸に身を寄せていた[13]。

このようにイスタンブルは，スコピエ時代のヤヒヤ・ケマルにとっては，

何物でもなかったのである。しかし，かれは次のような，かなり強引な筆法で，二つの都市の歴史をリンクさせる。つまり，スコピエはむしろイスタンブルの原型であったと言いたいのだ。

> イスタンブルの征服で血を流したのち，金角湾の岸辺に「スコピエ人街区」(Üsküplü Mahallesi) を創設し，イスタンブルに初めてトルコ人の酵母を与えたこの都市は，その当時は文明の一中心であった。学者，詩人，著述家たちが輩出し，スルタンたちのモスクにも劣らない数々のモスク，メドレセ，テッケ，ベデスタンや市場で飾られた。その文明は消滅するかわりに，湖水のように静止していた(14)。

昔も今もイスタンブルは多民族，多地域の出身者が，それぞれの居住区域を作って生活している都市である。上述の「スコピエ人街区」の所在は確認できないが，アルバニアやポーランドの名を冠した地名なら今も存在する。彼らはそれぞれ故郷に似た地形に，故郷に似た街並みを作るのが常であった。だからこの大都市に集まる人々は，いずれかの片隅に故郷の面影を認めることができた。ヤヒヤ・ケマルがイスタンブルに，失われた故郷スコピエの名残りを求めたのは，決して特別のことではない。実際，かれのイスタンブル詩の中に，スコピエに対する郷愁の屈折した反映を見出だそうとする論者もいる(15)。

1902年，18歳のヤヒヤ・ケマルは，スコピエから鉄道でイスタンブルに到着した。地方人ヤヒヤ・ケマルの，イスタンブルとの初対面である。

> シルケジ駅で下車したとき，私はすぐにアブデュル・ハミト体制の地方人に対する応対を実感した。私の旅券を調べる駅員と警官は，いかめしくも横柄で，地方人を外国人のように取扱っていた。これはイスタンブルに来る地方人がみな感じたところであるが，心の中にはイスタンブルに対する敬虔と畏怖の感情があった。イスタンブルでは，国家の強い手と威圧する顔が見えていた(16)。

イスタンブルでの生活は，親類縁者の家に寄宿することから始まった。第一の目的であったガラタサライ高校（リセ）には入学できず，ミッション系のロバート・カレッジへの編入を待つ状態におかれた。寄宿した家はボスポ

ラス海峡のヨーロッパ側海岸のサルエルにあった。

ボスポラス周辺ではありふれた木造家屋で，羽目板が黒ずみ，今にも崩れそうなあばら屋で，一階が男部屋(selamlık)，二階は女部屋(harem)であった[17]。

この家の所有者は，若いヤヒヤ・ケマルによって，崩壊寸前のオスマン帝国におけるイスタンブル市民の一典型として，次のように回想されている。

アーリフ・ベイは注目に値する人物であった。生粋のイスタンブル人(eski İstanbullu)で，裁判所の官吏であったが，2～3カ月に1度だけデルヴィーシュ風の衣を脱ぎすてて，イスタンブル市内まで棒給を取りに出かけた。古風な道化者の見本で，歯は欠け，ひげも無いみにくい男で，右手の指を唇と額に当ててお辞儀をするのが常であった[18]。

この家では家主を中心に「毎夜，歌と話の会が開かれ，飲み，歌い，サズ(三弦の伝統楽器)をかなで，議論をし」た。常連客の中に歌の上手な無職の人物がいたが，かれは役所勤めを熱望しており，「ああ，国家の棒給がどれほどすばらしいものか，君たちは知らないのだ」などと語りかける[19]。こんな雰囲気の中で，上京したての地方人ヤヒヤ・ケマルは，屈託した状態におかれていた。かれ自身の回想によれば，

1902年，私は18歳であった。フランスかぶれ世代の多くの若者たちの例にもれず，パリ熱にとりつかれていた。私の人生に最大の方向づけをしたこの情熱には幾つかの原因がある。それを話すなら，当時のトルコ青年の精神状態を説明したことになるだろう。

私はイスタンブルでは無職の地方青年で，フランス語はまったく知らず，「諸学の富」(Servet-i Fünun)誌上の「新しい文学」(Edebiyât-ı Cedîde)欄の詩，散文，翻訳，評論で頭がいっぱいになっていた。自分の国は牢獄で，ヨーロッパは光にみちた世界のように見えた。イスタンブルの監視されている雰囲気におびやかされ，とりわけアジア的な道徳には嫌悪を感じた。(中略)

船上で，街角で，鉄道馬車で，橋上で，いたるところで若者たちに注がれる東洋の慣習を墨守する――ならず者からいわゆる上流の人士ま

で――数千人の視線は，私の反抗心を駆り立てた。(中略)

スルタン・アブデュル・ハミトの統治は，情容赦ない偏執的な弾圧が空気を包んでいたので，当時のオスマン人は周囲に聞こえるすべての足音や息づかいから，密偵の気配を感じておののいていた[20]。

ヤヒヤ・ケマルにとっての最初のイスタンブル生活は1年足らずでおわり，1903年，かれはフランスに出発する。この間の経緯について，とりわけ「青年トルコ人」秘密組織との関わりについて，かれ自身は多くを語っていない[21]。アブデュル・ハミト専制下の「牢獄」とも感じられたイスタンブルを見捨てて，青年はヨーロッパへ，パリへと出航した。

私はイスタンブルを，ウスクダルを，ベシクタシを眺めていた。この上なく美しいイスタンブルの夕べであった。だが私は自分を祖国(vatan)から引裂かれた哀れな人間であると考えていた。(中略)日没が近づいて汽船は出航した。マルマラ海に入るとき，船尾にとどまり，イスタンブルが視界から消えるまで眺めていた[22]。

ここでヤヒヤ・ケマルは早くも「祖国」(vatan)という語を用いている[23]。しかし，この単語がかれにとって真に意味深いものとなるのは，9年の歳月をへだてて帰国した後のことである。かれのパリ生活は，その詳細について調査すべきことがあまりに多いが，とりあえず言えることは，第1次大戦直前のベルエポックのパリを，このトルコ青年が一人のコスモポリタンとして大いに享楽したことであろう。「私はフランスの詩と思想と趣味のかもし出す空気のなかで，水中の魚のように生きてい」た[24]。

母国でアブデュル・ハミト専制が倒され，「青年トルコ人」の政権が成立したのち，ヤヒヤ・ケマルは何らの学位も資格も取らない約9年間のパリ遊学を終える。

Quartier Latin で最後の夜を過してから Rue des Écoles に出たとき，私は脚がふるえるのを感じた。ついに今宵は青春に別れを告げて，異なる世界に入っていくのだと感じた，心は悲しみでみちていた。この9年間の私は Boulevard Saint Michel, Rue des Écoles, Observatoire および Montparnasse 通り，Saint Germain 通りの医学部に行く街角，Odéon

座，そして特にあの Luxembourg 公園などの家族のような庇護の下にいた。Vahchette を初めに何軒かのカフェーに立寄って，私が夕方イスタンブルに去ることを知った人々と握手したとき，彼らの顔に浮かぶ悲しげな微笑を私は見た。ガルソンたちも，私がいなくなることを信じられない様子だった[25]。

パリ時代のヤヒヤ・ケマルは，学問的達成はともあれ，西欧の都市生活を十分に享受したことは疑いない。親しんだ街角の名を一つ一つ呼び上げていく語り口，あるいは特定の地名に対する愛着は[26]，後年のかれのイスタンブルをめぐる詩と評論で反復されるモティーフとなる。バルカンの田舎青年は，近代的都市生活者としての感受性をパリで身につけたのであり，これがかれの都市論の出発点となったのである。1912 年，ヤヒヤ・ケマルは帰朝者として，アイヴァズオウル（Ayvazoğul, Beşir）の表現を借りれば「家にもどった男」（eve dönen adam）として，イスタンブルに帰った[27]。9 年ぶりに再会したオスマン帝国の首都は，帰朝者の目にどう映ったか。

朝，目が覚めて甲板に出た。遠くからイスタンブルが幻影のように見えてきた。比類のない春の朝であった。汽船はチラアン宮（Çırağan Sarayı）の前で錨をおろした。イスタンブルを出た当時，スルタン・ムラートの獄舎と呼んでみなが顔を背けていた荘麗なチラアン宮は焼失し，私の目前に骸骨のように立っていた。（中略）

船はゆるゆると埠頭に接岸した。私は同船者たちと別れて上陸した。旅券を調べる警察係官は不必要なほど厳格に応待した。出迎えは誰もいなかった。（中略）

私は馬車を呼びとめた。ディヴァンヨルを通って行くように命じた。埠頭からガラタ橋，バフチェカプス，バーブアリ通りへと進みながら，私は夢を見ている気分だった。馬車の上から見ると，両側の建物はいっそう低い印象を与えた。高い建物で囲まれた（西欧の）諸都市が，長年私の視覚に与えた影響が続いていたようだ。道路を往き来する民衆の衣服はみすぼらしく，背は低く，動作や態度は奇妙に見えた[28]。

スコピエから初めてイスタンブルに来たとき，首都の威容におびえたバル

カンの地方青年は，今度は西欧からの帰朝者，いやむしろ西洋人そのものの眼ざしで，同じ人々と街並みをながめている。再びアイヴァズオウルの言葉を引用すれば，「ヤヒヤ・ケマルが我々トルコ人の旧文明と旧社会とを批評するやり方は，それほど目立たないが，ややもするとひそかな違和感を生じさせる一種のピエール・ロティ趣味のあることを否定できな」い[29]。しかし，このような西欧の影響による視覚の変化を，詩人が明白に自覚していたことは，上掲の記述からも，また次の言葉からも読みとることができよう。「長い滞欧生活から帰ったとき，私はムスリム化し（müslümanlaşmış），わが同胞たちについて，過度に感じやすい気分にもどってい」た[30]。

2．郷土イスタンブル

ヤヒヤ・ケマルがフランスから帰国した1912年は，第1次バルカン戦争が始まった年で，翌年1913年のロンドン条約によって，オスマン帝国はイスタンブル周辺を除くヨーロッパ側領土の大部分を失った。スコピエももちろん占領され，1392年から続いたトルコ支配は終りをつげた。フランスから帰国したヤヒヤ・ケマルを待っていたのは，マケドニアの父祖の地から追い出され，イスタンブルやアナトリアに避難していた一族のみじめな姿であった[31]。文字通りの故郷喪失者となったヤヒヤ・ケマルは，この時からイスタンブルに住みつき，ここをかれ自身とトルコ民族全体の「郷土」（vatan）として構築していく。すでに見たように，若きヤヒヤ・ケマルにとって，帝都イスタンブルは異郷に過ぎなかった。帰朝者ヤヒヤ・ケマルが，この同じ都市を「郷土」として再構築していく過程には，感傷を超えた意志的なものが感じられる。1933年，トルコ共和国成立10周年を記念する出版物の中で，かれは「トルコのイスタンブル」（Türk İstanbul）という標題で，比較的長文の論文を発表している。その冒頭でかれは次のように述べている。

> ある風土（iklim）の景観（manzara）と建築と住民の間に純粋で完全な調和が存在するとき，そこに一つの「郷土の絵」（vatan tablosu）が現われる。土地を理解する感受性のある真の芸術家であれば，イスタンブ

ルの古い街々，たとえばコジャ・ムスタファ・パシャ，エユップ，ウスクダル，あるいはボスポラスの昔ながらの村落をながめたとき，「この住民はこの風土に悠久の昔から住みついてきた。この風土には，この住民とこの建築物こそふさわしい」と断言するにちがいない。（中略）郷土（vatan）とは，どの国であれ，あらゆる心ある人々にこういう予感を与える土地（toprak）をいうのだ[32]。

ここには「風土」（iklim），「土地」（toprak），「景観」（manzara），「郷土」（vatan）など，ヤヒヤ・ケマルのイスタンブル論の基調をなす概念がほぼ出そろっている。

これらの単語は広狭両義的に使用されているようで，例えば‘vatan’は文脈によって「祖国」と訳すべき場合もある。おそらくフランス語の‘patrie’に対応するものであろう。‘manzara’は「眺望」，「景色」，「景観」などの意に用いられ，より広義の「風景」の対語としては，‘peyzaj’すなわちフランス語の‘paysage’の用例が散見する。ところで‘paysage’には「風景画」の意もある。上掲の記述の中の「郷土の絵」（vatan tablosu）は，「郷土風景」と訳し替えても差支えあるまい。トルコにおける「風景」概念の所在については後段で検討するとして，ここで注目されるのは「郷土」が，景観・建築物・住民の三位一体の関係のうちに，把握されていることである。それではイスタンブルは，どうしてトルコ人の郷土でありうるのか。1453年の征服の日まで，ここはビザンティン帝国の首都であった。しかし，ヤヒヤ・ケマルの歴史観によれば，

トルコ人は五百年の昔から，イスタンブルとボスポラスを全人類の夢さながらに描き上げた。この都のすべての丘に，海岸に，隅々に，その建築物が立ちならび，あたかも「この世の続くかぎり，トルコ人の都であり続ける」ように感じられる。征服者（ファーティヒ）（メフメット2世）以来イスタンブルに住みついた人々が，この土地との適応をはたしたのち，まったく新しく創造した美は，最高の水準に達したと言うべきである[33]。

ということになる。これだけでは抽象的な議論にとどまる感じだが，もっと具体的な論証がこれに続く。

古きビザンスの廃虚の上に建てられた「トルコ人のイスタンブル」(Türk İstanbul) は，前者とはまったく異なる性格をもち，自立した民族の民族性のみを表現しているようにみえる。

トルコ人はイスタンブルを，1453年にビザンスから一つの廃虚の状態で相続した。その時この都市がどんどんなに荒廃し，欠乏し，疲弊していたかは，ビザンスびいきに間違いない歴史家シャルル・ディールさえ長々と説明しているところだ。(中略)

そうだ，トルコ人は15世紀にイスタンブルを廃虚として継承し，ただちに再建にとりかかり，1世紀の後には当時のヨーロッパで最大最美の繁栄する都市となした[34]。

ビザンスの帝都コンスタンティノープルの廃虚に対して，トルコ人はどんな寄与をなしたかという疑問に，かれはイスタンブルの輝かしい地名の数々を挙げながら，次のように応えている。

オスマン朝のトルコは，イスタンブルを城壁のわくにとどめず，はるかに広い市域の中で再建した。市城壁の内部だけでもファーティヒ，バヤズィト，スルタン・セリム，シェフザーデ，スレイマニエ，ミフリマフ・スルタン，スルタン・アフメット，ヴァリデ等の大モスク群，より小規模な他の名建築群は，トルコ人の建設がビザンス時代のコンスタンティノープルに，数において優越していることを示している。

ボスポラスはアジア側とヨーロッパ側の岸辺に沿って，マルマラ海から黒海への出口まで，別荘の建物で飾られた村々が連なり，地上に比類するもののない都市となった。ウスクダルはビザンス時代の狭苦しいクリソポリスの街から脱け出て，モスクと宮殿でイスタンブルに似た姿となって，海岸からチャムルジャの丘まで上昇した。

エユップは牛乳作りの村であったが，コンスタンティノープル征服の神聖な記念碑の周囲に民族建築の精華をもって造営され，時とともに大いに拡張されて，人の死を美しく見せる他に例を見ない死者の都市へと成長した。

ガラタは，ジェノヴァ人から獲得されてから，いっそう活力を増して

西欧との交易の中心となり，ますます繁栄して2世紀を経ずして城壁の外にあふれ，ベヨウルが出現し，郊外地区とともに今日まで拡大してとどまることを知らない。

ベシクタシは，海岸に沿って一方ではトプハーネまで，他方ではオルタキョイまで500年の歳月をかけて，平地がふさがってからは石段で丘陵を上って拡大し，それぞれの時代のモスク，霊廟，泉亭，宮殿，邸館で飾られた独り立ちの都市となった。スルタンたちがトプカプ宮殿に住むことをやめた19世紀中葉からは，このベシクタシ海岸は，新時代の建築で装飾された新様式の都市として復活した(35)。

ここで強調されているのは，トルコ人がビザンスのコンスタンティノープルの単なる相続人ではなく，新しい都市，大イスタンブルを創造したという歴史事実である。

征服時代の衰え切ったコンスタティノープルの狭小な市域と，トルコのイスタンブルのこの広大な境界とは何と大きな相違であろうか。この大都市の枠内で500年もの間，地震と火事の災厄で何度も美を破壊されながら，そのたびに崩れた建物を建直し，修復し，古い街区を再創造した。この時代を超えた現象は，民衆の持続的活力のこの上ない証左であろう(36)。

1453年の征服以後，「500年」の時間の経過のなかで，トルコ的イスタンブルが醸成されたというのが，ヤヒヤ・ケマルのイスタンブル論の骨子である。

人類の想像力に魔術のような影響を及ぼした（コンスタンティノープルの）征服は，歴史上の最大の事件の一つである。この時から何代もかけて建てられたトルコ人のイスタンブルは，この上なくまばゆく，人々の心に刻まれた都市である。トルコ人が地上に残した作品がなかったとしても，ただこのイスタンブルという作品だけは栄光の名に値いするだろう(37)。

この手放しのイスタンブル讃美は，単なるナショナリズムの発露とは言い切れない。これを裏返せば，トルコ人が世界に誇りうる唯一の遺産は，都市イスタンブルであるということにもなる。ヤヒヤ・ケマルがコンスタンティ

ノープルの征服を回想し，イスタンブルの栄光を称えていたのは，この都市が英・仏・伊連合軍の占領（1920－23），トルコ共和国の成立によるアンカラ遷都（1923）といった屈辱を強いられ，無冠の一港湾都市に転落した時期にあたる。ここには，失権し追放された貴種に対する哀傷の気持の方が顕著である。

連合軍によるイスタンブル占領ののち，私の心には深い憂いがあった。征服王（ファーティヒ）メフメットの時代にさかのぼる遠いむかしがしのばれた。気をまぎらすため，市域壁，エユップ，エディルネカプ，トプカプの街区やスレイマニエ，サライイチ，ルメリヒサルに，またキャーウトハーネの谷間に，たったひとりの散歩に出かけていた。こういう散歩で私が学んだのは，トルコの精神が我ら自身よりむしろ，これらの土地にあるということだった。そうだ，この土地にあるのだ。生れてこのかた書物の中だけで，フランス語の単語のように見えていた郷土（vatan）の概念を，イスタンブルの土地（toprak）に自然と融合した姿で見たとき，私はうれしかった。（中略）

このような散歩を試みてから私は，土地を愛し，イスタンブルを残りくまなく発見するのに，一生をかけても足りないのではとおそれている。今までの私にとって郷土（vatan）の概念は，頭の中の政治的思想にとどまっていた[38]。

イスタンブル市内から郊外にかけての散歩は，かれの詩と散文の成立を考える上で，見のがすことができない一要素である。これもまた，パリ遊学中に身につけた習慣の一つであろうが，かれ自身がその方法論的意味を意識していたことは疑いない。かれが好む散歩コースは，イスタンブルの歴史，それもトルコ人による征服から間もないイスタンブル草創期をしのばせる地区に集中している。コンスタンティノープル陥落の名残りをとどめる市域壁をめぐっては，

域壁の外に出たのち，マルマラ海から金角湾まで城塔を連ねて延々と続く城壁に沿って歩いた。落下した城壁の断片の上で休息し，足を踏みしめて城塔の頂きにすわって，征服王（ファーティヒ）の大砲と軍隊がやって来たエディ

ルネ通りの方をながめた[39]。

というような感慨にふけり，またボスポラス海峡を制したルメリ・ヒサルの城塞で，往時の英雄の足跡をたどる。

ルメリ・ヒサルの城塔の一つにある碑銘を見るために歩いていた。古い墓，モスク，メドレセ，浴場(ハマム)の碑銘を発見した近来まれな好事家ハリル・ベイが，ベベク側にある城塔の入口で，ザガノス・パシャの名をもつ碑銘を指さした。(中略)私は碑文をじっくりとながめた。これはイスタンブルの土地にある最も古い碑文であった[40]。

しかし，イスタンブルとその郊外のうちで，詩人がもっとも低徊して飽くところのなかった土地は，金角湾の入江の奥に位置するエユップである。西歴7世紀にコンスタンティノープルを攻略して戦死した伝説的英雄，アイユーブの墓廟を中心とするこの地区は，征服王(ファーティヒ)メフメット2世のときから，イスタンブルの聖地として拡大し，無数のイスラーム・トルコ人の墓所となってきた。

エユップ最初の墓廟とモスクからは，壁も残っていないが，民族の信仰のこの熱烈な舞台から，時とともにゆっくりと一つの都市が生まれた。それぞれの世紀の特徴をとどめる数々の墓廟・モスク，聖者たちの墓をもって，この都市は今も我らの眼前にある[41]。

と述べる詩人は，決して ethnic な意味合いで，この土地のトルコ色を強調しているわけではない。

ソコルル・メフメット・パシャ廟の窓から中をのぞいて見た。ヨーロッパの中央とも言うべき土地でキリスト教徒として生まれたのち，イスタンブルで世界最大のサルタナトを統治してイスラーム教徒として死んだこの偉大な人物は，一族とともにこの灯明のついた幕廟で休息している[42]。

これから見ても，詩人のナショナリズムが偏狭な民族主義から遠いことが理解される。ここで詩人は明らかに，故郷マケドニアに遠くないボスニアが生んだ偉大な大宰相と，みずからのルーツを重ね合わせている。エユップの墓地に眠るのはトルコ人だけではない。いや，むしろソコルルのようなバル

カン諸民族の出身者の数がまさるであろう。彼らはトルコ・イスラーム化した忠誠なオスマン臣民として，詩人にとっては同胞と意識されている。

エユップの墓廟の傍に一つの墓石がある。頂部のターバン状の浮彫から，これがイスタンブルに征服王(ファーティヒ)とともにやって来たトルコ人であることがすぐわかる。いまのわが国の民族詩人はだれ一人，この墓石に感じられるようなトルコ精神を持合せてはいないだろう。この石は征服王(ファーティヒ)の時代の豪気な兵士のように，私のまえにターバンをくずして直立していた。郷土についてのどんな文章，どんな言葉からも，この墓石に対して感じたような郷土の情感は得られない[43]。

ここに言う「トルコ精神」(Türk rûhu) とは，「征服王(ファーティヒ)の時代の豪気な (keyifli) 兵士」たちのもつ「豪気さ」と読みかえることもできよう。おそらく詩人は，バルカン辺境戦士らの最初の根拠地であった故郷スコピエの残影を，ここエユップの霊域に求めていると思われる。かれが愛したフランス詩人のひとり，アンリ・ド・レニエは，イスタンブルに来たときエユップにも立ち寄り，その印象を記するなかで，

イスタンブルよ。(イスラームの)信徒らがあれほど愛したエユップの糸杉の下で，私は自分がおまえの死者たちと兄弟であるように感じた[44]。

と述べている。この言葉を引用しながらヤヒヤ・ケマルは，異教徒の詩人をかくも嘆ぜしめたエユップは，トルコ人にとってはむしろ日常的な場所であり，「そこで来世の空気を呼吸するとき，我らは安らかになり，心を疲れさせることはない」と述べている。エユップを「郷土」として感受しようとする詩人の意思は，ここでも顕著である。エユップでの集団礼拝を描写する次の一節は，ほとんどかれの信仰告白と言えよう。

春，ラマザンの夜，礼拝のとき，どしゃ降りの雨がやんだ後の涼しいひととき，このあたりには説明しがたい色どりがある。あの照明された中庭，千年の樹齢をもつスズカケの木々の影。

戸口まで会衆があふれたモスクから，ときどきミュエッズィンたちの朗々と滑らかに響きわたる声が聞えてくる。それから周囲はしんとして，

ふたたび同じ声がいっそう感情をこめて高まっていく。

私の心臓は燃えるかにおもえた。(中略)エユップでのこの一刻は，いつまでも忘れられないだろう[45]。

ヤヒヤ・ケマルがイスタンブルに見出したもう一つの歴史的な「郷土」は，エユップとは対照的にイスタンブルの中心に位置するトプカプ宮殿であった。詩人は廃宮となって久しいこの宮殿を管理する一友人から，セリム1世がもたらした予言者ムハンマドの「聖衣」(Hırka-i Saâdet)の前で，16世紀初めからコーラン読誦が続けられていることを教えられ，

カリフの座であるイスタンブルの，このような場所のそばで，4世紀間も絶えることなく，コーラン読誦の声が聞かれたことを私は知らなかった。多くのトルコ人が，イスタンブルの住民さえ，このことを知るまい。この宮殿の中で400年の間に起こった紛争，廃位，殺し合いも，このコーラン読誦の声を，一刻も沈黙させなかった。このことを知ったとき，私はなぜ我々がイスタンブルから離れられぬのか，その疑問が氷解したような気がした[46]。

と述べている。そして次のようなメタファーに到達する。

私はイスタンブルの散策を通じて，一つの真実を発見した。この国家には二つの精神的基盤が存在する。アヤ・ソフィヤの征服王(ファーティヒ)のミナレから，昔も今も呼びかけられるアザーンと，セリム1世の時から（トプカプ宮の)「聖衣」(Hırka-i Saâdet）の前で続けられているコーランの読誦である[47]。

ここまで来ると，ことはイスタンブル都市論の範囲をこえて，ヤヒヤ・ケマルにおけるイスラームの問題に踏み込んでしまう。しかし，イスタンブルは詩人にとって，あくまでイスラーム伝統の都市として認識されている。この詩人にとってのイスラームが，多分に母性的なものであったことはすでに見た。かれのイスラーム的心情が，「郷土」と結びついて表白されるのは，次のような文脈においてである。

私はミナレと木々の間に，アザーンの声を聞きつつ成長した。あの祝福された環境から永らく遠ざかっていたが，このような朝の礼拝で母な

る宗教共同体（anne millet）に回帰できた。しかし，ミナレもアザーンもない街で生まれ，西洋式の教育をうけて成長したトルコの子供たちは，もどるべき場所さえ思い出せないだろう[48]。

ここでも告白されているように，フランスからの帰朝者ヤヒヤ・ケマルにとって，イスラームの戒律と慣習は異邦人のようになじみにくいものとなっていた。ヤクプ・カドリ（Yakub Kadri Karaosmanoğlu）は，この詩人が膝を折って坐ることができずに四苦八苦する様子を，皮肉な目で描写している[49]。したがって詩人のイスラーム回帰は，あたかも放蕩むすこの帰宅のような，苦い悔恨を感じさせる。

私が戸口から入っていくと，すべての会衆の目が私に注がれた。私を，もっと正確には私たちの世代に属する者を，モスクの中で見たことにおどろいていた。そこに，その時刻に集っていたムハンマドの同胞たち（Ümmet-i Muhammed）は，外国人でも入ってきたと思ったのだろう。私は沈んだ気持で静かに進んだ。正座して説教を聞いている二人の荷かつぎ人夫の間にすわった。（中略）説教につづく礼拝をともに行い，「ムハンマド」を呼ぶ声を耳にしたとき，私の目に涙があふれた。自分が彼らと一心同体であると感じた[50]。

ヤヒヤ・ケマルのイスラーム回帰は，どこまで可能であったのだろうか。それはさておき，詩人がイスラームを語るとき，いつも何がしかの心のこわばりと観念性がぬぐい切れない。郷土イスタンブルに寄せる自然な感情は，むしろ巷の生活のなかの，次のような体験に流露しているように思われる。

デフテルダルにあるセマイー演奏のある茶店に行った。通りから海の方へ下ったところにある広場はサズの音と歌声があふれている。木々の梢からは赤い国旗がゆれている。セマイー茶店はこの界隈の中心である。茶店の前の樹木の下のテーブルの周りに僕らはすわった。昔のイスタンブルの精神を，その言語と陽気な気分を継承している給仕たちの声がひびいて，お茶，コーヒー，水煙管の注文をゆたかな節まわしで帳場に伝え，火消し人夫のような敏捷さで跳びまわっている。盆の上に八つも十も茶碗をのせて，これを指二本で支えてはこぶ。ここには古きイスタン

ブルの生々とした絵が見られる[51]。

3．イスタンブルの景観

ヤヒヤ・ケマルは，イスタンブルの景観をながめるまなざしを，この都市を訪れた西欧諸国の文人の紀行や，みずからの西欧都市体験を通じて得たことを，少しも隠すことなく書き記している。かれのイスタンブル景観論は，じっさい次のような前おきから始まる。

> 19世紀にロマン主義がおこって自然を見る眼が開かれたとき，イスタンブルはあらゆる都市を凌駕するものとして現われ，ヨーロッパの最もすぐれた詩人たちの目を見開かせ，最も高尚な旅人たちの想像の中に位置をしめた[52]。

かれが最も敬愛し，繰返し引用する西欧文人のなかでは，まずテオフィル・ゴーティエの名があげられる。

> いつごろからか私は自分のまわりを眺めるとき，地上で最美の国で暮らしているのだと思うようになった。かなたに数多のドームとともにそびえる伝説の都……。テオフィル・ゴーティエ（Thèophile Gautier）が「地と空の間に波うつ最も美しい航路」と称えたボスポラス……海岸の離宮……オスマン期の別荘群……廃虚となった庭園……ひそやかな金角湾とその奥のサダーバード……城壁とその周辺には死者の園の糸杉……アナトリヤの白い岸……かなたには黒く浮かぶ（マルマラ海の）島々，ああ，これは一つの夢であろうか[53]。

ここで詩人は自らの郷土を，異邦人の想像力を借りてながめるという倒錯した視線を，むしろ楽しんでいるようだ。それどころか，眼前のイスタンブルの風光を，西欧のそれに見立てたりもする。

> 夕陽に赤く映える金角湾はヴェネツィアを想わせる。端から端まで湖を連ねたようなボスポラスはスイスに似ているし，マルマラ海のアナトリア側の海岸は，空中に音楽のただようイタリアではないか[54]。

とはいえ詩人は，このような借りものの視線に満足していたわけではない。

かれはこの都市の生活者であり，生活者だけが発見しうる美の多様性こそ，イスタンブルの景観を特徴づけるものだと主張している。

イスタンブルを，ウスクダルを，ボスポラスを，すべての丘から，すべての岸辺から，すべての街角から，四季の折々，朝，昼，夕，晩の各時刻にじっくりとながめるならば，芸術家は何と多彩な新しい美を発見できることだろう。これらの美を完全に収集するには一生涯かけても足りないと結論するに違いない。（中略）もっともこれは一芸術家の眼に映った側面のみを意味している。眼に見えない歴史的追憶にみちた内的な幻想のイスタンブルの中で生活するならば，はるかに広い別世界が感受されるであろう(55)。

詩人は歴史の文脈のなかで，都市イスタンブルの発展を3期に分けて考えている。

この土地でのトルコ人の生活は3つの時期をへている。第1期には，征服者たちが国家の建設に忙がしく，都市にも別荘地にも住むことなく，生涯を馬上で過ごしていた。メフメット（2世），セリム（1世），スレイマン（1世）のようなスルタンは，征途の幕営で死んでいった。死んだのち初めて都市に来て，墓廟の中で休息したのである。第2期には，国家を護持するスルタンたちは，都市のなかの宮殿で生まれ，生活し，死んでいった。トプカプ宮殿の全てがこの時期の霊園である。第3期は，今世紀をふくむわけだが，首都は別荘地へと拡散し，それ以来いわば空き家を想わせる状態となった(56)。

かように詩人は，自分がこの都市の凋落の季節に住んでいることを，かた時も忘れることがない。眼前の風景は死児の年齢を数えるように，過去の追憶と結びつけてながめられ，今や暗喩にほかならない数々の地名とともに語られる。

50年前まではイスタンブル，エユップ，ウスクダル，ボスポラスの各街区は，地上で見られる最も美しい場所であった。それぞれに特色があって，家並みも空気もたがいに異なっていた。ある街区から別の街区に行くと，一つの星から他の星に移ったような変化が感じられた。ボスポラ

ス海峡沿いのカンディリ，アナドル・ヒサル，カンルジャ，チュブクルのような隣り合う村々も，それぞれ独特の環境と空気と美しさをもっていた。場所が変れば，景観（manzara）も変るのである[57]。

イスタンブルを訪れた西欧の旅行者たちの多くは，広い市域に分散して拡がる街並み，市内にまで見られた多くの畑や果樹園に注目している。ヤヒヤ・ケマルの論中に見られる街区（semt）は，近代以前のイスラーム都市に見られた'mahalle'に該当するもので，それぞれ独立性の強い近隣地区を形成していたと想われる。

ある街区の基礎となるモスクは，単一の建物からなる礼拝の場所にとどまらない。そのモスクが寄進された時代を示す複合体であった。モスクと並んでメドレセ，イマーレット，病院，浴場，学校，時計塔，さらにモスクのミヒラブの側には寄進者の墓廟，家族や近親者の埋葬された墓地……要するに全ゆる形式によって寄進者の名を残し，その時代を証明する記念碑であった[58]。

今日もなおイスタンブルのスカイラインを決定している大モスク群のなかで，最大の規模と美しさを誇るスレイマニエ・モスクの建築について，詩人は，

穹窿はこれを支える地面に積み上げられたというより，あたかも天空から吊り下されたように感じられる。（中略）建築と装飾美術のこの完璧な作例においては，高貴・簡素・壮大さが相まって，見るものを飽かしめぬ景観（manzara）である[59]。

と評価している。そしてこのイスタンブル随一の直径をもつドームをめぐって，次のような建築史的解釈を加えている。

征服ののちイスタンブルでは，民族的建築が新しい段階に入る。信者らを単一のドームの下に集めることが求められ，この欲求がモスクの平面の拡大と，ドームの上昇への道を開いた。多くの小ドームを冠し，内部は多数の柱で装飾されるアラブ・イラン様式のモスクとの，これが分岐点となったのである[60]。

このようなモスクを建立し維持したのは，国家というより，スルタンを筆

頭とする支配階層の寄進による宗教財団，ワクフである。ヤヒヤ・ケマルは，「建築システムをめぐってすべての街区がそれぞれの特色を有し」たイスタンブルが形成された要因を，このワクフに求め，ワクフを税金のがれの対策とみなす近来の解釈を批判して，

> ワクフが多いのは，もっと美しい理由から来ている。収入の多い富裕な人々は，モスクや公共施設を造営することで郷土の一角に名を残し，民衆の尊敬をかちえ，名声を得ると同時に，来世での救済を感得していた。多少なりとも財産や土地を持つ者は，必ず寄進への意欲を持っていた。この感情は一つの伝統となり，ワクフのない人物は，高位高官に達しても軽蔑の目で見られた(61)。

と述べている。ここに指摘されているように，近代以前のイスタンブルは現世の生活のためだけでなく，来世での救済もめざして建設された都市であった。

> かつてイスタンブルの諸地区に見られた多様さは，来世的世界から人生の悦楽にいたるまで諸段階におよんだ。エユップ，コジャ・ムスタファパシャ，ウスクダルの縁辺などは来世的な場所であった。（中略）一方，これとはまったく反対にチャムルジャでは，あらゆる時間に安息と生活の喜びが感じられた(62)。

しかも，このいわば光と影の二つの世界は，必ずしも画然と区別されておらず，同じ街のなかで背中合せに存在することさえあったのである。

> 来世的なウスクダルの内部には，それと肉と皮のように密着して，まったく異質の歓楽的なウスクダルが，海岸から丘陵を越え，大チャムルジャと小チャムルジャまで広がっている。このウスクダルは，昔の音曲のうっとりさせる調べの中で，甘美な生活を続けている(63)。

建築史の観点からみると，イスタンブルの建物は，モスクや宮殿は石造あるいは煉瓦造であったが，住宅については，貴紳の邸から一般市民の家にいたるまで，木造が大部分をしめていた。

> 来世的であれ現世的であれ，これらの地区の建物はすべてきわめて簡素な木造で，邸宅（konak）や海辺の家（yalı）や別荘（koşk）と多数の

小さな家屋があった。(中略)

これほどわずかな材料で，それぞれが美しく目を惹く画面 (tablolar) を創造していることこそ，イスタンブルのトルコ・ムスリム住民の民族的卓越性を証明している[64]。

現世的なイスタンブルを代表するのは，金角湾やボスポラスの海辺に点在する「名所」(mesire)[65] であった。イスタンブルの貴紳や市民の行楽地となったこれらの名所は，それぞれの特色を有して，オスマン詩文学の源泉となっている。

キャーウトハーネの離宮，その格子窓や人工滝，亭々とした樹木，昔風な船着き場の崩れた敷石は，この土地にトルコの精神を，歌曲(şarkı)の旋律さながら浸透させているようだ。イスタンブルの土地の隅々に，トルコ精神の一頁がある。ルメリ・ヒサルやアナドル・ヒサルではトルコの力強さ，キュチュクスやギョクスではトルコの陽気さ，キャーウトハーネの歓楽，エユップの神秘[66]。

これらの名所の周辺に，トルコ建築を代表する木造の別荘が立ち並び，イスタンブルの夏の生活は，市内から別荘地へと移動したかの観があった。

イスタンブルがまだ清潔で秩序ある都市だった時から，わが父祖たちは別荘に行っていた。エヴリヤ・チェレビィがボスポラスの両岸を描写した頁を見るがよい。当時この海峡がウスクダルからベイコズ，ベシクタシからサルエルまで，村々で埋めつくされていたことがわかるだろう。(中略)

父祖たちはポスボラス，金角湾，チャムルジャの海と空気に，我々よりずっと親しんでいた。歴代のスルタンがそれぞれ自らの名を景勝の地に与えていたほどである[67]。

こうしてヤヒヤ・ケマルのいう「別荘の都」(Sayfiyede pâyitaht) が出現した。海辺の別荘は「ヤル (yalı)」と呼ばれ，その多くは木造平屋の簡素なものであった。別荘地への連絡はもっぱら水上を行く「カユク」(kayık) という軽舟に頼っていた[68]。「海辺」(Leb-i deryâ) が市民生活の景観の１つとなり，そこでは「時はゆっくりと流れていた[69]」。今日でさえボスポラスを

フェリーで行くとき，次のような情景の名残りがしのばれる。

両岸には花束のような村々，その村々の市場，樹木の下の茶館，美しい小路，趣味をつくした別荘，これら時の流れのみが創り出しうる美しさは，いかなる賢者の心をも動かさずにおかない[70]。

これほど多様な景観をもつイスタンブルにあっては，「人の心は倦むことがなかった。変化の尽きない都市景観が幻影を生んでいた」のである[71]。これは必ずしも物質的な豊かさを意味しない。市民の大部分はそれぞれの狭い居住区域のなかで生活していた。イスタンブル名物の「火災がこれらの街区を焼き払った後などは，その狭小さがいっそうはっきりし」た[72]。

かつてのイスタンブルは，そこで生まれた時から暮らしているイスタンブルっ子でも完全に把握できず，その大きさにおどろき，さまざまな伝説を語りついでいた[73]。

ヤヒヤ・ケマル自身は，第二の故郷と思い定めたこの都市で，多様な景観の発見につとめたすえ，次のような境地に到達する。

イスタンブルに長く住み，住むほどに多くの街々を愛し，愛すほどにそれらの歳月の深さをじっくりと学んだ人々は，年を経るにつれ学んだことどもに満たされて，この都市のもつ底知れぬ美しさを信ずるようになる[74]。

そして詩人は，イスタンブルの景観についての議論を，次のようにしめくくっている。

トルコ人がどんなに比類のない風景創造者（peyzaj yaratıcısı）であるかを示すには，何がなくともイスタンブル五百年を挙げるだけで足りよう[75]。

4．イスタンブルの「風景」

ヤヒヤ・ケマルは，イスタンブルの都市美を論じるなかで，「景観」（manzara）という語を多く使用し，「風景」（peyzaj）というフランス語源の用語はまれに見られるだけである。トルコには「景観」はあったが，「風景」はなかっ

た，と詩人は考えている。

西欧人たちがぼんやりと感覚的に理解したわが国の美しさを，我々は理解しようとさえしなかった。旧詩人たちは言葉の意味(mazmun)に凝るだけで自然は見えなかった。ナムク・ケマルやアブデュルハク・ハーミドのような新詩人たちは，意味の代りに思想をとり入れた。次の世代のテヴフィク・フィクレトやハーリド・ズィヤは，いわゆる地方色 (yerli rengi) を重視したが，ビュユクアダ，タクスィム，テペバシュ，フェネルバフチェ，ボスポラスの新しい景観を愛しただけであった(76)。

ところがヤヒヤ・ケマルの考えでは，「風景」が成立するためには，「文学の役割」が不可欠である。

コンスタンティノープル陥落以来，ビザンスとヨーロッパの著述者たちは，滅びたコンスタンティノープルを，生きて活動しているトルコのイスタンブルよりも生き伸びさせている。これから理解されるように，イスタンブルは存在するだけでは十分ではない。それが文学すなわち幻想 (hayâl) のうちに位置をしめることが必要なのである。我々トルコ人は，はっきり言えば，創造することは知っていても，書くこと，現実 (réalité) を幻想 (hayal) として描くことをこれまで知ったことがなく，今もまだ知らないままである(77)。

その結果はどうなったか。イスタンブルの「風景」は，この都市に住むトルコ人にとって，いまだに存在しないのと同じである。トルコ人が，この都市を知るために持っている最良の書物は「マンバリー (Mambury) のガイドブック」である(78)。

イタリア人やフランス人やドイツ人が，それぞれの国で記念建築と呼んでいるものと比較してわが国の場合を考えてみると，イスタンブルには 500 の記念建築があるが，そのうち 450 は我々の間でさえ知られていない。カスムパシャにあるピヤーレ・パシャ・モスクを知っているのは，数人の古建築研究者だけである(79)。

こういう状況はイスタンブルだけにとどまらない。トルコのどの地域にも共通している。そしてその原因は，文学の中の幻想としての「風景」が存在

しないことにある。

わが国の文学には，「郷土」(vatan)のぼんやりとした反映しか見られない。今日の地中海沿岸で最も美しい景観（manzara）はわが郷土の景観であるのに，現状はこんなところである。その理由はわが古典文学に自然への感受性が欠けていたことにある。新しい文学はやっと60年ほど前からの潮流で，あまりに未熟である[80]。

トルコ人のこのような傾向とは対照的に，「ひとたびイスタンブルを見た西欧人たちは，帰国するとこの都市について報告し，記述し，あるいは(絵を)画きつづけて飽くことがなかった[81]」とヤヒヤ・ケマルは言う。ここに文学と並んで絵画が，「風景」を成立させるもう一つの要因として登場する。詩人はトルコに，西欧絵画に匹敵するものがなかったこと，すなわち「絵画の不在」(resimsizlik）について，次のように論じている。

絵画の不在のゆえに，我々は父祖たちの顔を知ることができない。ああ，これは何と悲劇的な別離であろうか。我々は焼失したり崩壊した建築物や，昔の風俗を知ることができない。風俗ならば，それが何世紀もの間に徐々に変っていった過程を追うことができない。祖国の礎となった幾多の遠征と戦闘，勝利をもたらした栄光の軍隊を見ることができない。ああ，絵画の不在のゆえに，さらに何と多くのものを見られないことか。(中略)

西欧諸国に見られるように，わが国にもすべての時代のすべての都市に多くの画家がいて，彼らがそれぞれの印象にもとづいて，我々の民族的あるいは個人的な生活の全ての様相を描写し，それらが今日まで保存されて，我が国の広大で深遠な歴史をいつでも見ることができたならば……ああ，これは何と切ない願望であろうか[82]。

ここでくり返し言及される西欧絵画がどのようなものを指すのか，詩人はまったく説明していないが，ルネサンス以後の遠近法にもとづく写実的な絵画を意図していると見てよかろうと思われる。オスマン朝美術のなかには，ペルシア細密画の影響を受けながら，より日常的な題材を比較的リアルに描写したものが見出されるが，詩人がそれらに満足していないことは明らかで

ある。昔日のイスタンブルを訪れた「フランスの画家たちが描いた当時の絵は，今でも我々の目を眩惑する」といった言葉からは，西欧絵画に寄せる詩人の憧憬さえ感じられる。アイヴァズオウルの，次のような批判が出るのも，うなづけないこともない。

ヤヒヤ・ケマルが画筆を揮いはじめると，(中略)，アロム (Allom) やプレズィオスィ (Preziosi) の銅板画を想わせる風景 (peyzaj) が出現する。これこそが問題の避けて通れない側面である。つまり，我々はもはや自らをそのままの姿で見ることができないということだ。(中略)

かれが理解できなかったことは，我々が西欧的意味での絵画や散文を有したならば，我々の詩文学は存在しなかったであろうということである。絵画の不在のゆえに，我々が古い都市を，焼失し崩壊した建築物や古い風俗を知ることができないと言うのは正しい。しかし，もし我々の絵画が存在したならば，ヤヒヤ・ケマルが見ることを望んだ都市，建築物，風俗は存在しなかったであろう。なぜなら，絵画や散文学の基盤となる美学は，それらのものを別の形で表現したであろうから[83]。

アイヴァズオウルのこのような批判は，一見ヤヒヤ・ケマルの矛盾を突いているかにみえるが，この程度の論理を詩人が「理解できなかった」はずはない。かれの絵画論はすべて不可能なことを承知の上での，嗟嘆の声にほかならないことは，上に引いた文章の調子からも読みとれるところである。しかし，アイヴァズオウルも言うとおり，近代のトルコ人は圧倒的な西欧の影響を受けて「もはや自らをそのままの姿で見ることができな」い。ここでヤヒヤ・ケマルの言う「風景」の不在が，深刻な意味を帯びてくる。みずからの「風景」を持たない民族は，アイデンティティの危機に立たざるを得ないからである。

このような国の海岸で生活しているのに，われらはいつも別の風土への旅が喜びであることを知っている。夜になると鉄のふたで閉ざされたようなパリでの生活に，郷愁を感じている人もいる。(中略)

われらは西洋の一都市での生活を想いえがくとき恍惚とする。西洋の都市は本質的に，この美しいイスタンブルに優るものではない。だがヴェ

ネツィア，フィレンツェ，トゥレイトラ，ブルージュなどの都市生活は，幾千人もの巨匠たちが共有した主観性（enfüsiyyet）のなかに存在している[84]。

ここで詩人は主観性（enfüsiyyet）というアラビア語の哲学用語を，かなり曖昧な文脈で使用している。「存在（varlık）は主観的（enfüsî）なものに過ぎない」とも述べている。これを当面の問題である「風景」論に当てはめるなら，「風景」とは客体としての存在（varlık）に，主体としての人間が働きかけたことで生じた（主観的な）表象，または幻想ということになるのであろうか。そうだとすれば，西欧の都市が芸術家たちの幻想にもとづく「風景」のなかにあるのに反して，イスタンブルはいまだに「存在」するだけで「風景」を持たないということになる。

イタリアのヴェローナの街々には，いまでも巡礼にやってきた恋人たちが見られる。名高いロミオとジュリエットの故郷であるこの都市の住民は，昔の恋物語の神秘さの中で暮らしている。外からやって来た旅人たちは，ヴェローナ人をかの恋人たちの同時代人とみなしている。フィレンツェ人は古きフィレンツェに，ヴェネツィア人は古きヴェネツィアに，骨の髄までひたりきっている。これらの都市が何世紀も前からこのように生々としているのにひきかえ，わが美しい東洋の都市はなぜみな死んでいるのだろうか。その理由は明らかだ。消極的な人間と積極的な人間の比率は1,000対1である。積極的な人間，つまり偉大な芸術家やニーチェのいう超人たちが人々に生命を与え，それゆえに彼らは生き続けているのだ。トルコ人の中から一人の超人が生まれたとき，彼らの都市に精神を吹込むだろう[85]。

ヤヒヤ・ケマルは，ボスポラス海峡の景勝地がビザンスの遺産ではなく，トルコ人の所産であることの証左として「ビザンスの詩と散文に，ボスポラスの反映がまったく見られない」ことをあげている[86]。いかなる景観も，芸術のなかで幻想化され，「風景」に転化しないかぎり，存在しないも同然なのである。

ヤヒヤ・ケマルは，みずからを偉大な芸術家であるとか，ましてやニーチェ

的な超人であるなどとは決して想わなかったであろう。しかし，かれはその詩作によって，また古都イスタンブルに伝わる言語の美を通じて，おくればせながらこの都市の幻想を，換言すれば「風景」を構築することに生涯をついやしたと言えよう。

私は遠く異郷に生活していたころ，イスタンブルを一つの音楽的イメージ（timsâl-i mûsıkî）として想い出すことができた。薄れいく記憶から最後に残ったこのイメージは，年少期にまつわるものである。ある夏の一日，ボスポラスの岸から岸へ小舟をこいで，東方の気分にひたったことである。後年ニギャール・ハヌム（Nigâr Hanım）の詩を読んだとき，私はこの幻影がこの東方詩人の霊感の源であることに気がついた[87]。

ヤヒヤ・ケマルが追い求めたイスタンブルの「風景」のなかには，古き都に特有の言語の美と，トルコ古典歌曲（şark）の旋律までもふくまれる。詩人は近代自由詩の流行のなかで，あくまで古典的韻律を守り，さらには自分の作品が，トルコ古典音楽の調べにのせて演奏されるのを好んだといわれる。

5．イスタンブルの変容

ヤヒヤ・ケマルが生きた時代のイスタンブルは，オスマン帝国の首都からトルコ共和国の一港湾都市へと，運命の転変にもまれつづけ，新国家における工業化の波に洗われて，あらゆる面での変化を強いられていた。眼前に姿を変えていく街の中で，このパリ留学以来のボードレリアンは，あの有名な詩句を想い出すことが多かったにちがいない。

都市の形は悲しいことに，
人の心より早く変わる。（佐藤朔訳）

しかしながらヤヒヤ・ケマルは，都市の変貌を拱手して見守ることなく，生涯を通じて多くの警告と提言を――その実効性は別として――発表しつづけたのである。その発言の多くは，詩人の習慣であった散歩中の思索によるものであった。

きのうルメリ・ヒサルのふもとの船着き場を歩いていたとき，ベイコズの方角をながめておどろいた。火山でも出現したように，黒煙がバベルの塔さながら空中に噴き上げられている。船頭に「あれは何だね」と訊ねたら，こう答えた。「ガソリン・タンクが燃えているんですよ。2日まえからボスポラスでは煤煙で目も開けられません。悪臭で息がつまるので，ハンカチで鼻をおさえなければ誰も近寄れません。いま御覧になっているどころではない。きのうは火山が爆発したみたいでしたよ。会社は気の毒に大損害でしたろう」。

船頭の話を開きながら，私は今から70年まえにボスポラスを訪れたテオフィル・ゴーティエが「空と海のあいだに波打つ最も美しい航路はこれだ」と深い感動を表わしたことを思い出していた[88]。

ボスポラス海峡における環境破壊の一例であるが，ここでもゴーティエが引用されている。詩人はイスタンブルの「風景」に対する開眼をフランスの先覚に負っていることを，隠しだてすることがない。ところでボスポラスは，詩人が最も愛した散歩コースの一つであったが，それはイスタンブルをとりまくもう一つの海，金角湾とともに，工業化の影響にさらされていた。

1世紀まえは，ボスポラスに劣らぬ美しい海であった金角湾は，どこにあるのか。国家は海軍基地の必要のため，イズミル湾をさしおいて金角湾の一帯に艦船ドックを建設し，ここを工場用運河に変えてしまった。汚染はキャーウトハーネまでも達し，トルコ的行楽地の典型であったチャールヤンでは川沿いに狭軌鉄道が走っている。我々はすばらしき蒸気機械を先ず金角湾で採用したが，その波及効果は大きい。文明は，もっと大きな規模でボスポラスにも適用されよう。

金角湾が滅んでからボスポラスに避難した人々は，そこからさらに後方へと追い立てられている。もはやボスポラスはバクーからバツーミにいたる石油パイプの延長にすぎない。海岸は倉庫群に席捲された。(中略)サバヘッディン・ベイまでが「個人企業」のシンボルとして，父祖たちの離宮の廃虚の上に「金の錨」マークの倉庫を建てた。ネディームが「よくぞこられた。気高き太守よ」(Hoş geldin eyâ hıdîv-i ekrem)とうたっ

て大宰相を迎えた岸辺に，トルコ文明化の範例のごとく「金の錨」がかかげられている[89]。

この記述は，オスマン帝国の終焉を目前にした1922年に執筆された「散歩の感想」(Gezinti Tahassüsleri) と題する論説の一部である。イスタンブル市街の内と外にあって，この都市に爽やかな大気を供給していた金角湾とボスポラス海峡は，オスマン末期から工場地帯に転換しはじめていた。それはヤヒヤ・ケマルが最も愛した古典詩人ネディーム (Nedîm, Ahmed 1681?-1730) がうたった水辺の景観の消滅を意味していた。

ところで，ヤヒヤ・ケマルは，このネディームが死んだ1730年ころを境目にして，イスタンブルの変質と衰退が始まると考えている。かれはネディームが活躍したいわゆる「チューリップ時代」(Lâle devri, 1718-30) について，次のように述べている。

> このごろいわゆる「チューリップ時代」が，我々を眩惑している。この10年ほど前に現われた「チューリップ時代」の呼び名は，多くのトルコ人に深紅の花のように見えた。一時代の全てをこの「チューリップ時代」の看板の背後にながめて，これ以前と以後の時代は比較的にないがしろにされている。一つの時代が我々の目にこれほどに映るのは，たった一人の詩人，ネディームの書いた詩のおかげである。(中略)
>
> 現実には，トルコ文明は衰退に向かっていた。建築にも質の低いものが現われた。このことを知るためには，当時の泉亭やトプカプ宮殿内の園亭 (köşk) を見ればたりる。宮殿や家屋にヨーロッパ製品が入り込み，それらの様式とトルコ的装飾様式との混淆が始まった。芸術におけるトルコ的な趣味はしだいに低下していった。つまり，この時代を幻想にとらわれずに見るならば，内部からの衰退が目につくであろう[90]。

このようにヤヒヤ・ケマルは「チューリップ時代」を，オスマン文明 (medeniyet) の曲り角と考えており，これをとくに建築物の様式と趣味の変化に見出している。

> わが国の建築は1730年までトルコの巨匠たちの手中にあった。当時イスタンブルの景観は完全な高貴さを保っていた。1730年以降はトルコ出

身ではあるがまったく民族的でない建築家の手に移り，そのとき衰えが始まった。イスタンブルは1730年を境にはっきりと異なる都市となる[91]。

ここに見られるように，ヤヒヤ・ケマルのオスマン建築史に関する発言は，かなりの偏向と独断からまぬがれていない。16世紀後半に巨匠ミマル・スィナンが確立したオスマン建築様式は，1730年に先立つ「チューリップ時代」からヨーロッパの影響を受けていたし，1730年以後の代表的な建築物，たとえばヌル・オスマニエ・モスク（1755）は，「トルコ・バロック」とも称されるが，イスタンブルのスカイラインに，新しい美を加えている[92]。イスタンブルのモスクがすべてヤヒヤ・ケマルの推賞する「スィナン様式」で占められていたら，この都市の多彩な魅力は半減するであろう。スィナン時代の建築物の多くは，丘陵の上か斜面に建てられていたが，18世紀以降はボスポラスの海岸などが新しい敷地として開発された。水辺の建物が環境にふさわしいスタイルや装飾をもつのは自然であった。つぎに詩人のいう「民族的でない建築家」とは，一体だれを指すのであろうか。ヌル・オスマニユ・モスクの建築助手としてシモン(またはシメオン)の名が見え，19世紀のヌスレティユ・モスク（1826）のころから，アルメニア人バルヤンの一族がスルタン付の建築家として，モスク，宮殿などの大建造物の設計を独占するようになる[93]。これらに対する反感が，ヤヒヤ・ケマルの建築観に影を落しているのだろうか。

ところで詩人は，イスタンブル衰退のもう一つの契機を，スルタンが征服王（ファティヒ）以来の玉座トプカプ宮殿を去って，ボスポラスの岸辺に移ったことに見出し，くり返しその非を難じている。

19世紀になってスルタンは，ボスポラスへ赴くためにこの宮殿から出た。それは夏の別荘に行くかのように速やかに，挨拶もなしに行われ，宮殿は家具調度もなく，空虚なまま放棄された。今は文字通りほころびたカーテンや綿のはみ出したクッションやがらくたの絵が散乱しているだけである。しかし，この空虚さの中には完全なものにはない美と悲哀がある[94]。

この文章が書かれた当時のトプカプ宮殿は，まだ博物館として公開されておらず，文字通りの故宮として荒れるにまかされていた。スルタンのボスポラスへの移動は，マフムート2世のベシクタシ宮殿（1815），アブデュル・メジトのドルマバフチェ宮殿（1856）と段階的に進行し，最終的にトプカプ宮殿は放棄された[95]。スルタンに従うかたちで，首都の支配階層は狭義のイスタンブルの城壁内から，主としてボスポラス海岸に移住し，詩人の言う「別荘の都（Sayfiyede payıtahtı）が現出したのである。すでに見たように，詩人はこれをイスタンブルの多彩な景観の1つとして評価しているが，歴史の文脈のなかでは，

> イスタンブルはスルタン・マフムートが都を捨ててボスポラスに住みついた日まで変ることがなかった。その時から水洩れのする鉢の中のバラのように，しだいに枯れていき，葉が落ちて，終焉を迎えたのだ[96]。

と述べている。さらにこの後に続いたイスタンブル市民の郊外への流出については，

> トルコ人たちは最後の世紀の最も安楽で富裕な時代にイスタンブルを見捨てたのだ。我ら最後の世代の子供たちは，この放浪性の移住運動の最後の段階を目撃した。カディキョイからボスタンジにいたる奇態な広がりは，この最後の時代の現象である[97]。

ここに見えるイスタンブルとは，コンスタンティノープル旧城壁内の狭義のイスタンブルを指している。ガディキョイ，ボスタンジなどアジア側対岸の地区をふくむ大イスタンブルは，ここでは詩人の視野の外にあるようだ。つまり詩人にとっては，郊外はあくまで行楽地か別荘地としてとどまるべきで，都市の中心が失われ，市街が無秩序に拡散していく現象は耐えがたいものであった。しかし，詩人はイスタンブルの秩序ある美しさが，社会の変化とともに，すでに過去のものとなったことを知らないわけではない。

> 贅沢な海の家の持主たちの収入は，アナトリアやルメリアの農場からか，イスタンブル市内の不動産，あるいは国庫の支給する棒給から来ていた。中流またはもっと貧しい人々は，園丁，漁夫，軽舟の漕ぎ手などの素朴な手段で生活を立てていた。これらの収入源の多くは，周知の事

情でしだいに枯渇して，ボスポラスは往時の輝きを喪失した[98]。

イスタンブルの衰退の歴史をたどるとき，ヤヒヤ・ケマルの歴史観は独断と感傷でしばしば曇らされる。かつてはスルタンによって見捨てられ，今はトルコ共和国によって首都の座を追われた，旧都（たとえば京都，ペテルブルグ）に特有の誇りとルサンチマンをないまぜにした感情から，この詩人も自由ではないようである。詩人としての自然な感情は，

> 優美さ（incelik）は移ろい易いものだ。トルコ人は邸宅（köşk）や別荘（yalı）の建物を実に優美に作りなした。石や煉瓦より木材を好んで用いた。火災を怖れず，邸宅が焼ければ大工の親方にすぐ新しいのを建てさせた[99]。

とか，あるいは，

> 古い生活条件に適応して生き，かせいだ金と費した金の間に自然な均衡をたもち，昔ながらの近所つき合いの楽しさを信じている民衆がいたからこそ，これらの街は作り出されたのである[100]。

といった文章に流露しているように想われる。しかし，過去のイスタンブルはひとまずおいて，いま現に詩人の目の前で進行している都市の変容が問題になるとき，かれの筆致は現実性を帯びはじめ，まず近代都市における大衆の姿が浮んでくる。

> 日没ののちイスタンブルの街路に人影もまばらな時刻に，カディキョイ，ハイダルパシャ行きフェリーはノアの箱舟のように混み合っている。埠頭では地獄の雑踏だ。ロドス（南西）風のためにフェリーが，ストライキのために電車が動かない日の夜には，首都の市民は宿なしになる。フェリーと電車のほかに，彼らをイスタンブルのふところに運べるものはないからだ。戦争成金だけが，ふたたびイスタンブル市中に邸宅を打建てたが，これは大衆の恨みを買って「ブルグル（アラレに似た菓子）宮殿」と呼ばれている[101]。

次に詩人の目には，破壊者としか映らない資本家たちの街ベヨウルが，

> ベヨウルはイスタンブルの富を横領した後，名誉も名声も繁栄も何もかも奪って拡大し，上昇し，あふれ出た。（中略）どの石にも過去の精神

の存在しない建築物の堆積は，さらに増大するだろう。なぜならムスリムの不動産業者は，キリスト教徒の富豪たちと建設競争を続けているからだ。ベヨウルが夜ごと光に包まれて輝くとき，旧イスタンブルは暗い闇の中で喪に服している(102)。

詩人が最も嫌悪するのは，「精神の存在しない建築物の堆積」が街並みをおおうことである。

百年前までのイスタンブルは，その外観のすべてがトルコ都市であった。西欧の心ある芸術家たちがこぞって忌み嫌った「レヴァント」風の建築物は，このところ蟲が美しい布地を食いあらすように，イスタンブルの景観をがつがつとむさぼり食っている。このままでは全イスタンブルは，不快な建物の堆積と化すだろう(103)。

ここに見える「レヴァント」風の建物とは，19世紀末から流行した一見オリエント風の装飾をもつ折衷的な建築で，その作例は現在のイスタンブル，とりわけベヨウル地区に今も見出される(104)。これらの建築の設計には西欧の建築家も参加していたが，「都市がその土地の子である建築家によって」建設されることを希望するヤヒヤ・ケマルにとっては，この状況は「ヨーロッパの多くの都市を荒廃させた」いわゆる「様式喪失」(inconsience de style)にほかならなかった(105)。建築における民族様式の存続は，そのままイスラームの存続に重なりあう。

今のトルコ人の父親たちは，空気も土地もイスラームの夢にみちた街区で生まれ，生まれた時から耳にアザーンの声を聞かされ，家の中では礼拝する年老いた乳母たちをながめ，祭日の夕べにはクッションの隅からコーランを読む声に耳を澄ましていた(106)。

これにひきかえ，イスタンブル郊外に開発された近代的な街区においては，

私はこう自問する。「シシリ，カディキョイ，モダのような街区で生まれ，育ち，遊んだトルコの子供たちは，民族としての十分な成人礼を受けうるであろうか」と。これらの街区ではミナレも見えず，アザーンも聞かれず，ラマザンやカンディルの祭日も理解されない。子供たちはイスラーム的な子供時代の夢をどのようにして見るのであろうか(107)。

つまりヤヒヤ・ケマルにとって，イスタンブルは何よりも「ウンマ」(ümmet，イスラーム共同体）であり，イスタンブルの存続は「ウンマ」のそれにかかっている。新しい街区にイスラーム色が薄れていくという事実は，一種の戦慄をもって受けとめられる。

> イスタンブルに降りかかったこの不吉な前兆を，だれが振り払うことができようか。だれがこの人々を，父祖たちの遺灰でこね上げられたこの都市に連れもどしてくれようか。イスタンブルは往時のようにトルコ人を，イスラーム教徒を待っているのだ。首都はふたたびトルコらしさを回復できるだろうか(108)。

このような立場からヤヒヤ・ケマルは，イスタンブルの近代化に名を借りた西欧化に，激しく抵抗する姿勢をみせた。

> 例をあげれば，英語に park というものがある。これは英国人の言語のために生まれた言葉である。イスタンブルの park は何のためにあるのか。我々はイスタンブルの古い「名所」(mesîre) をなぜ廃止してしまったのか。青い海の両岸が草地で，ボート遊びのできる純トルコ式の名所だったクシディリには，何か西欧思想に背馳するものがあったのであろうか。(中略）必要とあらば，過去にもどろう。「広場」(meydan) を空地とみなして「公園」(park) に直すなどはもってのほかである。「公園」を作りたいという情熱はどこから来るのか(109)。

すでに見られたように，ヤヒヤ・ケマルはイスタンブルの都市計画に，外国人が参加することに拒否反応を示している。

> 我々は一都市の必要とするもの，建設のための能力，そしてとくに歴史的追憶にかかわることを，外国人よりはよく知っていると私は言いたい(110)。

と述べる一方，「わが国の建築家たちは，いまだに優れた都市計画家（urbaniste）であることから遠い」として，伝統的な糸杉を伐採したり，古いモスクを修理するより復元してしまった例などをあげている。

イスタンブルの歴史的な名所や環境の破壊に対しては，

> ギョクスにある製糸工場のためには，そこ以外に場所がなかったのだ

ろうか。工場の存続のために国民的な名所を，カレンダーの頁をはぎ取るように奪って捨てる必要があろうか[111]。

とあるように，歴史と伝統を擁護する立場を貫いてはいるが，時代の流れに抗する無力感が吐露されるときもある。

私は西洋人が，ボスポラスに倉庫や貯蔵所があふれていることを慨嘆しているのを読んで知っている。だが慨嘆しているのは文人であって，かれの声は現実にはとどかない。文人の声が聞き入れられることはヨーロッパでさえまれである。巨大な工業と商業が美を破壊するとき，文人は叫喚し，呪詛し，悲嘆するが，銀行や工場主は見えぬ聞えぬ連中であって，休むことなく侵略を続けている[112]。

こう見てくると，イスタンブルの近代化について，詩人はつねに保守的な立場を維持しているように見えるが，より積極的で具体的な発言がなかったわけでもない。例えばイスタンブル知事の司会した講演（1935）のなかでは，将来のイスタンブルの進路として，①中継都市，②工業都市，③観光都市の選択肢をあげ，それぞれの得失を論じている。また市内の交通問題については，ボスポラス沿岸に住宅地を開発し，自動車道路で都心と結ぶよう提案して[113]，

新時代においては，海の家（yalı）や軽舟（kayık）は忘却するか過去の思い出として残すにとどめて，海辺（Leb-i deryâ）を，両岸に伸びる広い道路と丘陵上に現われた村々をふくめた１つの住宅地として，開発することを考えるべきである。今は自動車やバスがあって，市内で生計手段を得ている市民は，ボスポラスの丘の上の家に容易に速やかに帰宅したいと望んでいる[114]。

などと，伝統擁護の立場からは意外に感じられる現実主義を見せている。もっとも，ことボスポラスに関するかぎり，詩人はその別荘地としての展開に対し，シニカルな視線を隠していなかった。

今世紀の貴紳たちは，借款がかさんでからっぽの国家財政をわすれて，とにかく夏の別荘で暮らすことを望んでいた。イスタンブル市内から別荘へと逃れて，夏も冬もそこで時を過ごすことを渇望していた。とはい

えヨーロッパ文明が，ここにアーチ橋や海底道路や豪華なホテルを建てるのを見たいとも思っていた。住んでいる場所が汚れると，他の場所に移ろうとする動物たちの本能的な行動と同じである(115)。

イスタンブルの都市計画に関するヤヒヤ・ケマルの提案のうち，唯一注目に値いするのは，イスタンブルを「大学都市」とする構想である。この構想の目的は，これによってイスタンブルに固有の「言語の美」を守ろうとすることにあった。ヤヒヤ・ケマルが確立しようとしたイスタンブルの「風景」のなかには，言語もふくまれていたのである。

トルコ精神は，「イスタンブル方言」(İstanbul lehçesi) と呼ばれる言語の美を，400年の歳月をかけて創造した。我々の新しい文化は，この言語において表出されるだろう。イスタンブルはトルコ思想をイスラーム世界に，トルコ世界に，さらにヨーロッパ世界に向けて容易に伝播させうる一大中心である。イスタンブルには広汎な文化伝統が存在する(116)。

ヤヒヤ・ケマルは，都市の景観が移ろい易いものであり，とりわけ木造家屋が大部分をしめたイスタンブルの街並が，過去に何度も変容を重ねてきたことを認めている。

これらの街々は500年来変わらなかったように思われるが，実は歳月を重ねる間に幾度となく火災に遭遇し，そのたびに新たに建て直されたのである(117)。

詩人は都市の変容そのものを否定するのではなく，その変容がゆっくりと時間をかけて，内発的に生じることを希望しているのである。したがって，イスタンブルの将来についての詩人の見通しは，時には奇妙なほど楽観的なものともなる。

古きイスタンブルの美しい街区を創造したトルコ精神は，東洋文明の中で生き続けていた。(中略)今は西洋文明の空気と原則と生活条件の中で生き，それに応じた住居と街と都市を作らなければならない。トルコ精神が民族的自覚をもつならば，人生と生活の景観 (manzara) は，昔とは異なる様式ながらやはり美しくなり得るだろう(118)。

お わ り に

ヤヒヤ・ケマルはパリ留学より帰国した年（1912）から，1958年に没するまで，外交官として外国に出た期間をのぞけば，ずっとイスタンブルでの生活をつづけた。終生家庭を持たず，イスタンブルとその郊外で趣味の散歩を続け，国際級ホテルのバーやサロン，海辺のレストランやカフェーで，親しい友人や若い崇拝者たちと歓談するのを常とした。

本論で引用した詩人の文章は，講演筆記，書簡，ノート断片，新聞・雑誌の記事などからなり，初めにのべたとおり，イスタンブル論という形でまとめられたことはない。本論中に引用した文章は1914～1942年の長期にわたるが，第二次大戦後の晩年に書かれたものは，今回は入手できなかった。

今日のトルコで，詩人ヤヒヤ・ケマルの名は，旧都イスタンブルのメタファーに近いものとなっている。それは古典詩人ネディームの韻律を現代によみがえらせ，すでに現実から幻影へと移行しつつあったイスタンブルの「風景」を，紙上に構築したこの人物には，ふさわしいことに思われる。かれはきわめて意識的に，この都市の「風景」を創出しようと努力した。そうしなければ，圧倒的な西欧の影響にさらされて，トルコ人が「風景」を持たない民族となることを怖れたからである。

詩人がしばしば用いる「トルコ人らしさ」（Türklük）とか「トルコ精神」（Türk rûhu）といった概念は，決して過剰なナショナリズムの所産ではなく，西欧文明に追いつめられ，アイデンティティの危機にさらされた東方弱小民族の，いわば防衛本能に発するものであった。詩人は，高く評価していたロシア文学について，

> ロシア小説が新しい文学の最高の達成であることに疑問はない。それは我々の世代に身近であるというだけでなく，我々と同様，初めは東方文明の中でまどろみ，次いでおろかなフランスかぶれの段階をへて，ついにこれから脱却したという点で，我々をいっそう考えさせるものがある[(119)]。

と述べている。かつてのロシア人と同様に「東方文明の中でまどろ」むことが，もし可能であったなら，トルコ人もわれらの詩人も幸福であったにちがいない。しかし，西欧という他者の視線にさらされ，自らもその視線に同化される危険のなかで，民族の「風景」を創出することは，いかに至難の業であったことだろう。ヤヒヤ・ケマルの嘆息が聞えてくるような気がしてならない。

みずからへの回帰ということが問題にされると，私は，好きだったフランスの詩や散文をお払い箱にして忘れさり，アナトリアかイスタンブル，それともブルサかエディルネの古い街区に引きこもって，最後はまったく自分を閉ざしてしまいたいという気持になってくる(120)。

註

(1) 本名は Mehmet Âgâh で，トルコ共和国の姓氏制の採用 (1934) により，Beyatlı 姓を帯びるが，慣用にしたがって筆名 Yahya Kemal で言及することにする。

(2) ヤヒヤ・ケマルの実弟レシャトによると，この一族の父祖のなかには，オスマン帝国草創期のバルカン征服に活躍した英雄 Gazi Evrenos を筆頭に，Malik Paşa, Şehsuvar Paşa, Nişli Nâfiz Paşa, İvranyalı Hüseyin Paşa など歴史に残る将軍たちの名が見えている。ヤヒヤ・ケマルが採用した姓 Beyatlı は，父祖の一人 Şehsuvar Paşa の名をトルコ語に直したものであろう。(Reşat Beyatlı, Yahya Kemal'in Hayatı, 'Yahya Kemal Enstitüsü Mecmuası: 1', İstanbul, 1959, s. 138.)

(3) Yahya Kemal, Aziz İstanbul, 'Yahya Kemal Külliyâtı: 5', İstanbul, 1974 (以下，A İ と略記)

(4) Yahya Kemal, Çocukluğum, Gençliğim, Siyâsî ve Edebî Hâtıralarım, 'Yahya Kemal Külliyâtı: 10', İstanbul, 1973 (以下，Hat. と略記) s. 1.

この生家は実弟レシャトによれば，バヤズィト 1 世がスコピエを征服したとき (1392) の軍司令官イスハク・ベイの名を冠したモスクから「5～10 メートルほど」のところにあった。(R. Beyatlı, op. cit. s. 135.)

(5) Hat. s. 35.

(6) ibid., ss. 45-6.

(7) ibid., s. 54.カルシュヤカ（Karşıyaka）はスコピエ近郊の集落らしいが，「ヴァルダル(Vardar)の向いにある避難民地区」とも記されている(Hat. s. 64.)

(8) Hat. s. 59.

(9) 'Türklük'という用語は，ヤヒヤ・ケマルに特有のものではなく，同時代のトルコ知識人が多く用いた基本概念で'Osmanlılık'に対応するものであった。新井政美氏はそれぞれ「トルコ人たること」，「オスマン人たること」という訳語を与えている。(新井政美「Türk Ocağıの設立をめぐる二，三の問題」，『西南アジア研究』No. 31，1989．59頁）なお新井氏はこれに先行する諸論文でも，これらに関して論じている。

(10) Hat. s. 47.

(11) ibid., s. 55.

(12) ibid., s. 57. 現代トルコ文学の小説の分野を代表する作家ヤクプ・カドリは，ヤヒヤ・ケマル終生の友人であったが，初めて詩人に会ったときの印象を「オスマン領土の遠隔の地方からやってきた田舎出の若者を想わせ，言語には軽いルメリアなまり（hafif bir Rumeli şivesi）があった」と回想している。(Karaosmanoğlu, Yakup Kadri, Gençlik ve Edebiyat Hatıraları, Ankara, 1969. s. 142.)

(13) Hat. s. 66.この人物はスコピエのイサ・ベイ・モスクのワクフ管理人で，イスタンブルにも家産を有していた。

(14) Hat. s. 47.

(15) 例えば，詩人がイスタンブル市内で，コジャ・ムスタファ・パシャ街区を特に愛した理由を，この街区とスコピエとの相似性に求めようとする。A. S. Ünrer, Üsküp Nerede ?, 'Türk Edebiyatı: 134', 1984, s. 12.

(16) Hat., s. 67.

(17) ibid., s. 71.

(18) ibid., s. 73.

(19) ibid., ss. 72-73.

(20) ibid., ss. 74-76.

(21) 後年（1935）の談話では「1903年に『青年トルコ人』運動にかぶれて(kapılarak) パリに行きました。当時の言葉でいえば遁走したのです(firar etmiştim)」などと語っている。(Yahya Kemal, Edebiyâta Dâir, İstanbul, 1984（以下，ED と略記）s. 257.

(22) Hat., s. 78.

(23) 'vatan'というアラビア語単語を，近代的な「祖国」の意味で用い始めたのは，通説によれば，「新オスマン人」の一員であったナームク・ケマル(Namık Kemal, 1840-1888）である。

（護雅夫，トルコの思想家 —— 自由主義の父ナームク・ケマル ——，「講座東洋思想 7，イスラムの思想」，236-266 頁。）

(24) Hat., s. 106.

(25) ibid., s. 88. 「パリでは Sciences Politiques 校に入りました。著述家 Albert Sorel の有名な歴史講義がありました。かれの影響を受けて，祖国の歴史を読み始めました。読むほどにアナトリア，ルメリア，イスタンブルのトルコ的なもの(Türklük)に，これまでと異なる興味を覚えました」。

（談話筆記，ED, s. 257.）

この Albert Sorel（1842－1906）は，ヤヒヤ・ケマルによってしばしば言及されるが，両者の影響関係についての調査はほとんど行われていない。テーヌ（Taine, Hippolyte 1828-93）の弟子で，'L'Europe et la Révolution Française'の著書があるが未見である。

(26) ヤヒヤ・ケマルの詩における地名（と人名）の効果的な使用法については，(B. Ercilasun, Yahya Kemal'in Şiirlerinde Yer ve Şahıs Adları, 'Ölümünün 25 inci Yılında Yahya Kemâl Beyatlı', Ankara, 1983. ss. 123-142.)

(27) Ayvazoğlu, B., Yahya Kemal－Eve Dönen Adam－, Ankara, 1985. 本書は私がアンカラ滞在中に刊行され，新聞その他でヤヒヤ・ケマル研

究の大きな収穫と評価されていた。

(28) Hat., ss. 125-6.

(29) Ayvazoğlu, op. cit. s. 35.

(30) Hat., s. 125.

(31) ibid., s. 13., 帰国した詩人は，イスタンブルのアクサライ街区に避難している家族（祖母，乳母などをふくむ）と再会した。祖母はその後アナトリアのバルケスィルに移住した。

(32) A İ. ss. 9-10. 1942年，イスタンブルのベヨウル地区公民館（halkevi）で行った講演の草稿。

(33) ibid., s. 10

(34) ibid., ここで言及されるシャルル・ディールの著作は，Charles Diehl, Constantinople, Paris, 1924を指すものと想われる。本書中のイスタンブルに関する記述については，小山皓一郎「イスタンブルの緑地——過去と現在——」『史朋』第21号，1987.1〜11頁。（以下，小山・1987と略記）参照。

(35) A İ. s. 50. この記述に見えるイスタンブルのトポロジーについては，鈴木董〔著〕大村次郷〔写真〕，「イスタンブル歴史散歩」河出書房新社，1993．参照。

(36) A İ. s. 51.

(37) ibid. s. 29.

(38) ibid., s. 138.

(39) ibid., s. 81.

(40) ibid., s. 85. ルメリ・ヒサル（Rumeli Hisar）はボスポラス海峡を制するため，コンスタンティノープル攻略に1年先立つ，1452年に完成された。城塔の1つの建設をザガノス・パシャ（Zaganos Paşa）が担当したのは事実だが，その碑文がイスタンブル最古のものか否かはまだ確認していない。cf. Goodwin, G., A History of Ottoman Architecture, London, 1971. pp. 103-105.

(41) A İ. s. 54.

(42) ibid. s. 157. ソコルル・メフメット・パシャ（Sokollu Mehmet Paşa, 1505-1579）の墓廟はエユップにある。この大宰相の生前1574年に，巨匠スィナンによって建造された比較的簡素な建物である。(Goodwin, op. cit., pp. 281-2)

ボスニア出身のソコルル（またはソコロヴィチ）が，昔も今も民族の違いをこえた英雄であることは，たとえば，アンドリッチ(松谷健二訳)「ドリナの橋」(現代東欧文学全集12，恒文社，昭和41年)におけるこの人物の描かれ方を見ても理解されよう。

(43) ibid., s. 43.

(44) ibid., s. 127.

アンリ・ド・レニエ（Henri de Régnier）は，1906年にイスタンブルを訪れているが，ここに引用された文章の原典はまだ入手していない。

(45) ibid., ss. 157-158.

(46) ibid., s. 117.

(47) ibid., s. 120.

(48) ibid., s. 124.

(49) Karaosmanoğlu, op. cit. s. 170.

(50) A İ. ss. 123-124.

(51) ibid., s. 158.

(52) ibid., s. 10.

(53) ibid., s. 148. テォフィル・ゴーティエは，1852年にイスタンブルを訪れ，旅行記'Constantinople'を著した。本書にはボスポラスの詳細な描写があるが，ここに引用されている文章は発見できなかった。

(54) ibid., s. 148.

(55) ibid., s. 75.

(56) ibid., s. 141.

(57) ibid., s. 62.

(58) ibid., s. 52.

(59) ibid., ss. 59-60.

(60) ibid., s. 53.

(61) ibid., s. 52.

(62) ibid., s. 63.

(63) ibid., s. 77.

(64) ibid., s. 64.

(65) イスタンブルの「名所」(mesire) については，小山・1987,2－3頁。

(66) A İ. s. 138.

(67) ibid. s. 142.

(68) ヤヒヤ・ケマルは，ネディームの詩を引用して，「カユク」が水辺の行楽地への快適な交通手段であったとしている (AÍ. s. 142)

(69) A İ. s. 66.

(70) ibid., s. 134.

(71) ibid., s. 63.

(72) ibid., s. 63.

(73) ibid., s. 143.

(74) ibid., s. 75.

(75) Yahya Kemal, Mektuplar ve Makaleler, İstanbul, 1977. (以下，MMと略記), s. 32.

(76) A İ, s. 139.

(77) MM, s. 32.

(78) A İ, s. 167.

(79) ibid.

(80) ibid, s. 76.

(81) ibid, s. 143.

(82) ED, s. 69.

(83) Ayvazoğlu, op. cit. ss. 35-36.

(84) A İ, ss. 149-150.

(85) ibid., s. 150.

(86) ibid.

(87) ED, s. 207.

ニギヤール・ハヌム（Nigâr Hanım, 1862-1918）は，トルコと西洋の音楽に通じ，トルコ詩人フズーリーとフランス詩人ミュッセを崇拝した女流詩人。(Türk Dili ve Edebiyatı Ansiklopedisi, Cilt 7, İstanbul, 1990, ss. 56-57.)

(88) A İ, s. 133.

(89) ibid. s. 135.

サバヘッディン・ベイ（Sabahedddin Bey 1877-1948）は，アブデュル・ハミト2世の息女を母とするオスマン王家の一員で,「青年トルコ人」運動に参加した人物である。ネディーム (Nedîm, 1681-1730) は「チューリップ時代」を代表する詩人。ペルシア詩の影響から脱したオスマン詩の完成者といわれる。

(90) ED, s. 186.

「チューリップ時代」(Lâle devri, 1718-1730) という時代呼称は，歴史家・詩人，アメフト・レフィク（Altınay, Ahmed Refik, 1880-1937）が，同名の標題を持つ歴史書を刊行（1912）したことに由来する。

(91) A İ, s. 163.

(92) Goodwin, op. cit. pp. 381-386.

(93) バルヤン（Balyan）家の建築活動については，Goodwin, op. cit. pp. 419-423.

日高健一郎・谷水潤「イスタンブル」(建築巡礼 17)，丸善，1990.101－102 頁。ガラベット，ニコオス父子が建設したドルマバフチェ宮殿(1855)が代表作である。

(94) A İ, s. 115. ヤヒヤ・ケマルはトプカプ宮殿が「国家よりもスルタン，トルコ人よりオスマン家，アジアよりオリエント」のものであると述べている（ibid.）

(95) Çelik, Zeynep, The Remakıng of Istanbul, University of Washington Press, 1986. p. 130.

(96) A İ, s. 143.

(97) ibid.

(98) ibid., s. 66.

(99) ibid., s. 136.

(100) ibid., s. 64.

(101) ibid., s. 144.

これは金角湾の入口にあるガラタ橋の埠頭の情景描写であるが，1860年代に同じ場所を観察したイタリア人作家デ・アミーチスの描写と符合するところが多い。(小山・1987，3－4頁参照)

(102) ibid. s. 143.

ヤヒヤ・ケマルのベヨウル観はいささかアンビバレンツの感があり，次のように評価する場合もある。「ここはヨーロッパから切りとられ，ムスリム・トルコ社会の懐中に定着した一断片である。この1世紀間のわが国の文化興隆にさいして，ベヨウルがはたした役割は大きい。だからわが国における西欧の源泉を求めて遠くに行く必要はない」(ED, s. 285.)

(103) A İ, s. 147.

(104) 例えば，オリエント鉄道の終着シルケジ駅舎，ペラ・ホテル，ドルマバフチェ宮殿などを指すものと思われる。

(105) A İ, s. 162.

(106) ibid, s. 121.

(107) ibid.

(108) ibid., s. 144.

(109) ibid., s. 169.

(110) ibid., s. 163.

(111) ibid., s. 169.

(112) ibid., ss. 135-136.

(113) ibid., s. 161.

(114) ibid., s. 66.

(115) ibid., s. 135.

(116) ibid., ss. 172-173.

(117) ibid., s. 64.

(118) ibid., s. 65.

(119) ED, s. 297.

(120) ibid.